

Ⅱ 特別連載 Ⅱ

科学技術
振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第 425 回

大島商船高専の活動報告



朴 鍾徳
(大島商船高等専門学校
商船学科教授)

離島環境における

SDGs達成に向けた実務学習

科学技術振興機構(JST)「さくらサイエンスプログラム」による本事業は、SDGsをテーマとした課題に英語で取り組むことにより、実務学習の知見と技術を取得すると共に、英語学習の意欲向上と国際性の涵養を目的として実施しました。海上における実務訓練を通して、パートナーシップの醸成と実践的コミュニケーション能力の向上を目指しました。

国際交流プログラムの期間を9月8日～9月14日(全7日間)に設定し、海外の学生と一緒に英語で取り組むキャンプを計画しました。参加希望者の募集は、本校の国際交流において実績のある海外教育機関(シンガポール・フィリピン・台湾)、中四国地区の高専そして全国の商船学科のある高専などにご案内しました。その結果、海外から15名(さくらサイエンスプログラムの支援による招へいは8名)、国内から15名、合計30名の学生に参加していただくことになりました。本校で開催する国際交流イベントとしては大規模なものとなります。

研修2日目に、海上における実務訓練の一



練習船「大島丸」での体験航海におけるロープワーク

プログラムスケジュール	1日目	岩国及び福岡空港到着後、本校へ移動 オリエンテーション、イベント
	2日目	基調講演(SDGsを通じて、豊かで活力ある未来を創る) 海上における実務訓練(SDGs課題14)
	3日目	陸上における体験学習(SDGs課題7、課題9) 特別講演(防災ネットワーク)、大島丸ガイダンス
	4日目	体験航海、外部参加教員による講演(SDGs課題7) 体験学習(平和公園、原爆ドーム他)(SDGs課題16)
	5日目	出入港配置、体験学習(厳島神社) 体験航海、電気推進船を学ぼう(SDGs課題7)
	6日目	外部参加教員による講演(SDGs課題17) 最終報告会、修了証授与
	7日目	体験学習(錦帯橋他)、解散・帰国

つである、水上オートバイ救助訓練を本校のPWCレスキュー部が中心となって実施しました。水辺の救助を体験すると共に、海洋環境の大切さを学ぶことができました。また、カッター実習(小型船舶の操船訓練)では、パートナーシップの重要性について、体を使って経験してもらいました。

研修3日目の陸上における体験学習では、産業と技術革新の基盤について学ぶ機会をつくり、各グループのリーダー役がキャンパスの案内と英語の通訳を担当しました。また、各研究室の案内役として、研究室の学生が主体的に英語のプレゼンテーションを行い、学生間でコミュニケーションできる環境で学んでもらいました。

研修4日目および5日目は、練習船(大島丸)による大島までの体験航海を実施しました。国内外の学生が船内で寝食を共にし、パートナーシップで目標を達成することに挑みました。また、大島丸の電気推進について乗組員から説明を受け、クリーンエネルギーについて考える機会をつくりました。さらに、広島到着後には平和公園を訪問し、平和と公正を学ぶ機会を、宮島に到着後には世界遺産を見学することにより異文化交流する機会を設けました。



外部の講演者によるグループワーク



水上オートバイ救助訓練



修了式後の集合写真



研究室案内およびプレゼン

本校の学生たちは、プログラム終了後も海外の参加者との交流を続けており、SNSを通じて日頃の学生生活や趣味について話し合っています。来年3月に計画されている春季海外研修プログラムでは、本交流に参加された国々に本校の学生達を派遣する予定です。学生たちが海外へ飛び立つ原動力に繋がることを大いに期待しています。

参加者にはSDGsに関する課題に取り組んでいたが、想定以上の成果を得ただけでなく、今後の国際交流の継続に一層役立ちることが実感できました。

「さくらサイエンスプログラム」のお陰で、お招きした海外からの参加者を十分におもてなしすることができ、本校だけでなく、高専、津山高専にも国際交流の輪が広がりました。

2日間の実習で、パートナーシップや実践的コミュニケーション能力が向上しました。国際交流プログラムの期間中、外部の講師だけでなく、本校の教員や海外からの引率教員によるさまざまな実践的講義を実施し、教員間の英語運用能力の向上を図りました。研修6日目は、専門分野に対する講義内容に対してグループワーク形式の参加型学習を実施しました。SDGs課題としては、7(エネルギーをみんなにそしてクリーンに)、9(産業と技術革新の基盤をつくらう)、14(海の豊かさを守ろう)、16(平和と公正をすべての人に)、17(パートナーシップで目標を達成しよう)について考えてもらいました。

一方、コミュニケーション力やチームワーク力に関してはやや向上がみられました。自分自身が最も成長したと評価したところは、チャレンジ精神や異文化適応力と考えていることが分かりました。総合的に見ると、国内の学生の方が海外の学生よりも達成度において高い自己評価をしており、プログラムに対する満足度が非常に高いことを伺い知ることができました。

今後、もう少し長い時間をかけて、参加した学生の変化と成長の課程を見守っていく必要があると思われます。

◎ 後日談と今後の展望

本校主催の高専グローバルキャンプには、海外から多くの参加者をお招きしたいと考えておりましたが、円安の影響により航空券などの予算が実施経費を圧迫する恐れがありました。そこで、計画段階で高知高専や鈴鹿高専の国際交流担当者からアドバイスをいただき、「さくらサイエンスプログラム」に申請することを検討しました。